

いのち

鳥取県 雲光寺 住職 瀬田啓道

昨年の夏残暑が厳しかった頃、私のもとに突然友人の訃報が届きました。その知らせを聞いた時、私は一瞬耳を疑い信じる事ができませんでした。

その友人とは、学生時代度々顔を合わせ、互いの性格や将来についてなどさまざま語り合い、食事をしたり、仲間と旅行に出かけたり、親交を深めていました。卒業後も仕事のことや家庭のこと、学生時代の思い出話に花を咲かせたものでした。コロナ禍となりその友人とは会えなくなっていました。これからの再会を望んでいただけに、私は悲しみや落胆色々な思いがこみ上げてきました。

しばらくして、友人が生まれ故郷の丘の上に静かに眠っていると聞き、（ご）実家とお墓にお参りすることにしました。（ご）実家では、友人のお父様が出迎えて下さいました。お位牌に手を合わせ、お父様から彼の幼少期や思春期の話、仕事や家庭に対する思いなどを伺いました。

お父様は「あいつに伝えたかった事や、話したかったことは山ほどありますが、あいつなりに仕事に向き合い、懸命に働いて命を燃やした切ったのだと思います。皆さんがあいつの事を思って来てくださって

ありがたいと思います。こんなにもたくさんの人に支えられて生きていたのだなど、つくづく感じます。息子は本当に幸せな人生だったと思う」と話して下さいました

曹洞宗のお経「修証義」は、「生を明らめ死を明らむるは仏家一大事の因縁なり」と始まります。「明らめ」とは、明らかに知ることを指し、生・老・病・死を受け止め明らかに知ることが、仏道を歩む上で最も重要であるということです。

友人は自身の生老病死に苦悩しながらも、彼なりに命の有りようを感じ、親しい人と心を通わせ、繋がりの中で懸命に生き抜いた生涯であったと思います。そのことを示すかのように、彼のご実家のお仏壇とお墓には、その人柄や歩んできた人生を慕ってたくさんのお花やお供えがたむけてありました。

私は墓前で「君の人柄や声を聞くことはできなくなっただけど、いざれ再会できるのを楽しみにしながら生きていくよ。それまでどうか、君が生涯の中で大切にしていた人達のことを見守っていて下さい。縁あって共に歩んだ日々をありがとう。また来る」そう告げて帰路につきました。